

5班 実験展示班代表者 中村先生に聞く

実験展示班の企て

「あるく 身体の記憶」について

Talking about the Autumn Exhibitions; Its Theme, "Walking"

中村 ひろ子 (COE特任教授)
NAKAMURA Hiroko



昨年度から、本年秋の実験展示にむけて展示班が動きだしました。これまでそのメンバーのいく人かの方にこの誌面で抱負や想いを書いていただきましたが、いよいよ展示の本番に臨むリーダーにお話をうかがいました。

いよいよ11月の展示をむかえますが、

中村 はい。まずなぜCOEで展示をするのかについてお話ししたいと思います。COEに限りませんが、このような研究プロジェクトの中に展示というプログラムを組み入れているところはほとんどないのではないかと思いますので、今、研究の成果を社会に向けて還元することが求められていますね。そのためにはどのように発信していったらよいのか。研究成果の発信にはいろんな方法があって、その中心に出版があるかと思います。神奈川大学のCOEでも最終年を迎え研究成果を発信するために数多くの出版計画が進んでおりますし、来年2月には3回目の国際シンポジウムを開催しますが、シンポジウムも発信の有効な方法でしょう。その中で私たちは展示という形での発信を試みたいと思っています。

実はこの展示は「実験展示」となっておりまして、「実験」とあることから博物館関係の方々からはよく「皆を驚かせるようなどんな新しい展示方法を見せてくれるのか」といわれるのですが、この「実験」に込められたのは、今お話ししたように、研究成果を発信する方法と

して、展示というものがどれくらいの有効性を持てるのかを検証しようというところに「実験」の第一の意味を置いています。ですから展示場においていただいた方を展示手法の斬新性で驚かせることは出来ないかもしれませんが。展示の中身に驚いていただけるとよいのですが。

もちろん、研究成果の発信ということですのでCOEの「非文字資料の体系化」という課題にどう答えるかが課せられていると思いますが、COEは多くのプロジェクトから成っておりまして、それぞれの成果が揃いますのが今年度ということになります。ですからその成果を展示に反映させるのはかなり難しい。展示班では、今年の成果をもとに来年度に展示ということだといいいのに、という話も出たくらいです。その中でテーマとして選びましたのが、今回の「あるく 身体の記憶」です。

この展示テーマについてお話しする前に、研究成果発信としての展示ということについて少しお話をしたいと思います。と申しますのも、展示といえはまず博物館を思いおこされる方が多いでしょうから。もちろん博物館における展示も、学芸員の方々の調査研究の成果還元です。た

This autumn, we will hold a new exhibition at Kanagawa University.

Its theme will be "Walking". It's just one of our everyday actions,
but we want to think about it from various points of view.

Everyday things are so common, that we often don't recognize their importance.

Though our space is not large, we are trying to make a new style of exhibition.

Walking in the dark, walking on a slope, walking in the grass and walking in the mud ;
Walking is walking, but the action is often unconsciously changed.



舞踊家
宮 操子 さん

「アサヒグラフ」(朝日新聞社発行)の1949年12月14日号に「お履物拝見」とのタイトルで各界名士16人の履物の紹介がされていた。以下はその一部。各々の肩書きは今から60年前の斯界の現役の方々のものになる。



画家
東郷 青児 氏



拳闘家
白井 義男 氏



東大教授
渡邊 一夫 氏

だ博物館の学芸員の方たちはご自分の研究テーマや関心だけでなく、地域が抱える課題や利用者の方たちが知りたいと願っていることを、あるいは潜在的な関心を読み取って展示テーマを選んでいらっしゃるのではないのでしょうか。今回の私たちはCOEが新たな研究領域を切り開きたいと願って、こういうことをやりましたということをおある意味一方向的に、みなさん興味があるかどうかはわかりませんが...、というところからのスタートになる。そこに違いがあるように思います。

一方、例えば印刷物による研究成果の発信と比べましてもいくつか違いがあります。まず、対象のひろがり異なります。基本的に報告書などの出版物は研究者に向けてですよね。いわば仲間内への。展示は研究者の方に向けてと同時に、報告書などはお読みにならないお子さんから大人の方まで、そして展示場の、神奈川大学のあります地域の方々にも見ていただける、いや見ていただきたいものです。そういう意味で発信の中身は同じでも対象が違う、他のCOEの発信との役割分担と考えたいと思っています。

今一方向的発信になると申しましたが、それはテーマの選択にあたってのことで、展示は出版物とは異なり基本的に発信者と受け手が同じ時間、同じ場所で交流がで

きることに特色があると考えています。展示はどなたかにわざわざ来ていただいて、その展示の前に立っていただく、そこに初めて展示という行為が成り立つものだと思いますので、もともと参加が前提ですが、今回はもうひとつ、展示の制作にも評価という形で参加していただけたらと。評価といいましても出来上がった展示の評価だけでなく、制作途中での評価を考えています。まず、今回の展示テーマへの関心や興味のあり方を学生や一般の方々からアンケートやインタビューでうかがい、展示の導入や展開に生かしたい。次いで展示のストーリーや展示方法が固まりましたら、解説ラベルの中身や文体、字数から動線、空間のデザイン、照明、今回でいえば体

験の仕掛けなどまで、様々な面からの展示のメッセージがきちんと伝わる展示になっているかどうかを評価していただく。出来ればオープン前に、そしてオープン後も評価を聞き、修正できることがあれば手を加えていく、ということができるとよいのですが。そして、最後に展示批評という形で評価をいただけたらと願っています。展示途中評価はやっと試みる博物館が現れはじめたところですが、展示批評の方は学会誌などで定着しつつあります。といっても書評に比べましたらまだまだです。一番の問題は特に企画展など期間が限定されていて、書評のように書き手とは別の人がそれを検証できない、批評

された側も反論できない、なにしろ消えてしまいますので。その意味では劇評や演奏会評に近いもので、それはそれで生ものであると仕方ないとは思いますが、今回のように研究成果の発信という意味付けをした場合、それでよいのかということで、展示を映像に残せないかと思っています。ただ、専門家の手になるものではありませんが、一応展示終了後も検証の対象でありたいと思っていますので。

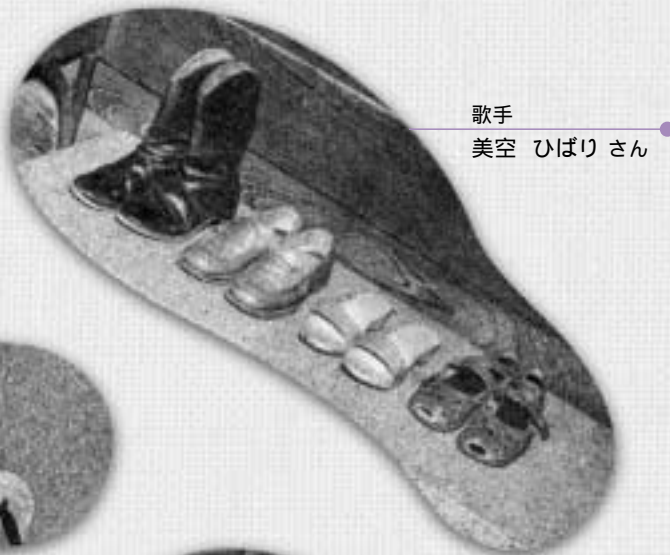
「あるく」がテーマと聞きました。「歩く」というのは動詞。動詞が一番普遍性の高い言葉ですね。いろんな意味で「歩く」という言葉はつかえる。それを置100枚分の展示スペースでどう展開するのか...。中村 はじめから「あるく」をテーマとしたわけではありません。この展示の趣旨からいえばテーマは「非文字資料の統合発信」なのですが、この大きなテーマを大学内の限られた展示空間の中で、展示という形にするにはどういう枠組みが考えられるのか、特にCOEでは非文字資料のなかでも図像、身体技法、環境・景観の三つを柱に進めてきましたので、はじめはこの三つの非文字資料の相互関係がしっかり示せるテーマはと、実験展示班内



スケート選手
稲田 悦子 さん



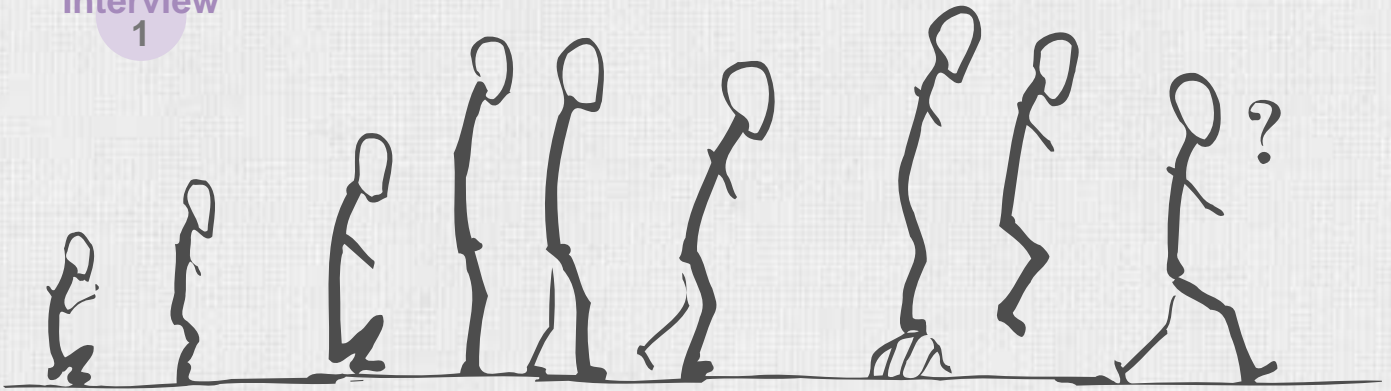
力士
千代ノ山 關



歌手
美空 ひばり さん



登山家
堀田 彌一 氏



佇立と歩行の進化のコース
「ヒトの足 この謎にみちたもの」(発行：創元社)より

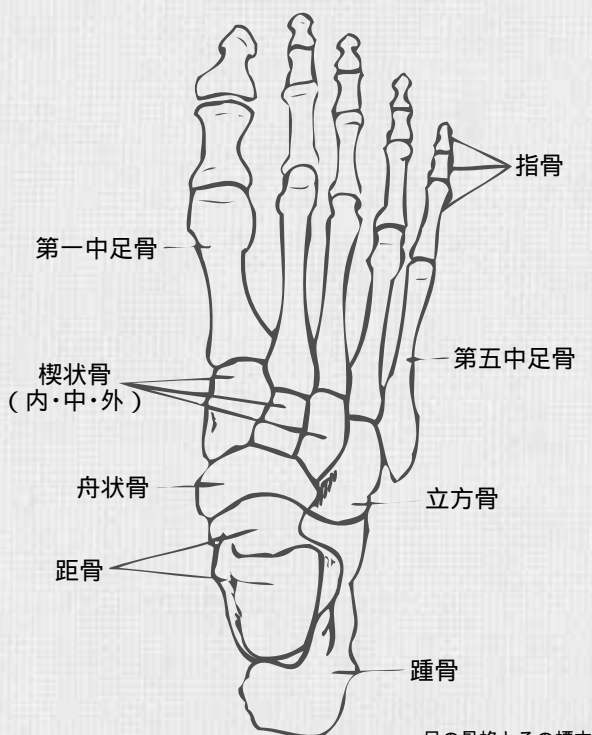
で検討しました。その中で、展示をご覧いただくのは必ずしも研究者の方々だけではありませんので、まず非文字資料という存在そのものを広く知っていただくことに意義があるのではないかと、従来の文書をはじめとする資料でなくても、図像、身体技法、環境・景観などからも私たちの歴史や文化、暮らしを明らかにできるのだということ、を、「こんなことも資料になるのだ」ということを伝えることから始めようということに。展示を見る方それぞれが、ご自分の身体という存在を通して非文字資料に出会って下されば、ということで身体技法をテーマとしました。ただ研究上の概念用語ともいうべき「身体技法」に代えて「身体の記憶」という表現を選びました。正直なところ「記憶」というのは多用されている感もあって新鮮味に欠けますが、イメージも伝わりやすいので

はということ。

私たちの身体の中には行為とか動作とかというかたちで蓄積されてきた記憶があると思います。そこには何代にもわたり受け継がれてきたもの、自分で作り上げたもの、あるいは意識的なもの、無意識的なものなど様々なものがあるでしょうが、展示を通して自分の身体が記憶しているものに出会って欲しい、ひいてはそこから非文字資料という存在にも出会って欲しいと。ここまで来て、では身体技法の何をというところに…。本当に多様でいくらかでもあるわけですので、かなり論議をしているんな案が出ましたが、最終的に「あるく」になりました。

確かに「歩く」が一番基本的な動作ですが、展示にはそぐわないかもしれない、一番展示しにくいだろうという論議がありました。ただ、それはまた、どこにも展示したことがないということでもありますから、その意味では最初に言いましたのとは別の意味で「実験展示」になり得るのではないかと。といって、たとえ研究成果の展示だ、実験だといってみても、来ていただいた方に楽しんでいただけたら、いろんな新たな発見があったりという展示でなければ始まりませんが。

長々とテーマが決まるまでを話してしまいましたが、まだまだ「歩く」の何をさせるのかの論議が続きました。現代の私たちに限っても、その歩き方は一様ではありません。私たちは人の歩いている姿から様々なことを見て取りまします。年老いているか若いのか、男か女か、職業や地位は、といったことはもちろん、気ぜわしそうだとか、とぼとぼと元気がない、といった状況、表情までも読み取りましますし、また同じ人でも服装や履物によって、荷物を持っているか、子どもの手を引いているか、あるいは山道か闇夜かななどによっても歩き方は変わります。しかし、歩き方を変える、あるいは歩き方が違うといったとき、「歩く」という動きのどこに変化や違いをみているのかということになりますと、必ずしも明らかではない



足の骨格とその標本
「ヒトの足 この謎にみちたもの」(発行：創元社)より

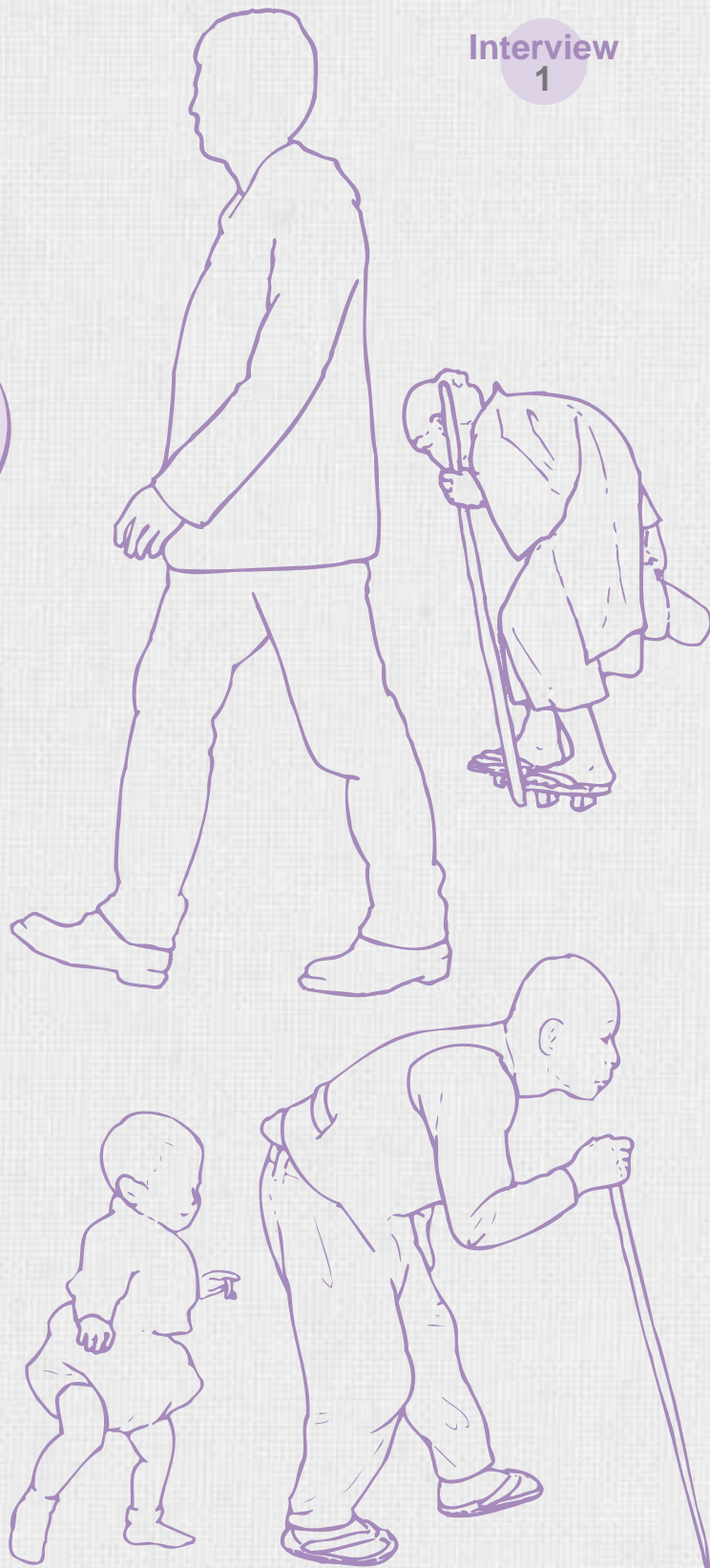


Interview 1

展示会場にいらして、ぜひ「あるく」に参加してください。
明日からは、街を歩きながら自分の歩く姿を
ショーウィンドーで確認したり、歩きはじめに手と足を
どう出したらよいかと考え込んだり。
ぎこちない歩き方になるか、歩くのが楽しくなるか...

のです。「普遍性の高い“歩く”って言葉、それを畳100枚分のスペースでどう展開するのか」と尋ねられたように、まさに何をということになりましょう。そこで、現代の私たちはいろいろな歩き方をしていますが、昔からこういう歩き方をしてきたのだろうか、ということに絞ることにしました。そして図像資料を使いましょう。日本常民文化研究所が『絵巻物による日本常民生活絵引』として編纂した中世の図像資料や、昭和初期に澁澤敬三が撮影した映像資料といった、神奈川大学で持っている資料を使って、日本人の「歩く」ということを考えてみましょうということになりました。例えば、現代とは異なるナンバという歩き方、行進のように近代が作り上げた歩き、芸能や能などにみられます長年かかって作り上げられた歩きなどを通して考えてみましょう、というようなところでだいたいの骨格みたいなものが一応できたということなんです。図像資料から歩き方をきちんと認識するのは難しく、動く映像となると時代が限られるという問題はありますが、目的は「歩く」ことに関する研究成果の発信ではなく、身体が持っている記憶に出会ってもらおうということですから。

こうして骨格ができたところで、いよいよ展示計画を立てる段階に入りました。展示会場を大きく二つに分けたいと思っています。一つが「歩き」を体験する体験回廊とも呼ぶべき空間です。そこで人々はスクリーンに映



“ Walking ” has various meanings. Some people may imagine sunbeams,
if they like taking walks. Some may imagine a rustic location without machinery.

And some people may imagine mankind itself,
because walking erect shows the difference between mankind and apes.

Walking erect out of the forest may have been our first steps taken.
There are many ways and possibilities to exhibit “ Walking ”.
We have been discussing them for over one year.



し出される映像を手本に様々な「歩き」を体験します。いつもと違う歩きをしてみることで、自分の身体が記憶している歩き、あるいは記憶していない歩きに出会います。そして回廊を出まして、展示されている資料を手がかりに、今体験した様々な歩きについて検証するというか、整理してみるという構成を考えてみました。

この他、展示会場内にぬかるみやでこぼこ道、あるいは暗闇を作り歩いていただくかの案もありましたが、展示会場や安全性の点から実現を諦めました。いろいろな履物を揃えておき、例えばアシナカや田下駄、男の方にハイヒールなど、日頃とは異なる履物に履き替えて歩いてもらい、歩き方のどこが変わるのかを感じてもらおうという案は検討中です。いずれにしても、体験というプログラムを組むためには人とプログラムを結ぶ人の存在が欠かせませんので、博物館学を学んだり学芸員を志向している院生の参加を得たいとは思っています。

また、制作途中への参加の話のなかで、この展示にはできるだけ様々な方々に様々な形で参加していただきたいと申しましたが、そのためにはバリアフリーという課題があります。今回は展示会場の構造からいって厳しいものがあまして、入口や動線を変えることで少しは対

応するということが出来ませんし、展示そのもののバリアフリーにつきましてもその方法について必ずしも論議が深まっておりますが、今回の展示が非文字資料を多用し、体験を伴いますことから何らかの方法をと考えました。いくつかの博物館で試みがなされています、触る展示をと思い、先日も盲支援学校の先生にご相談にうかがったりしておりまして、いまだ模索中です。

もうひとつ考えているのですが、展示をつくる過程を報告書として残そうということです。展示批評のところでも触れましたが、展示は消えてしまいます。出版物だったら残るのですが、そこで、展示そのものの記録もですが、制作過程を、今私が話しているようなことも含めて記録する。毎回の班会議の様子を記録していますので、その中の主だった議論を、例えばどのような提案があり、それに対してどのような意見が出され、どのようなやり取りがあって展示として立ち上がってきたのか。諸般の事情で諦めざるを得なかったのか、などなど。これもひとつの試みかと思っております。

11月にはぜひ展示会場を訪れ、体験し楽しんでいただくという形で、あるいはご批判をいただくという形で、私共の企てに参加して下さることを願っております。

(2007年7月9日 於COE共同研究室 聞き手：香月洋一郎 記録：小野地健)

実験展示開催予定

入
場
無
料

「あるく 身体の記憶」

日 時：2007年11月1日(木)~30日(金) 10:30~16:30 *11月3・4日を除く日曜・祝日は休館

会 場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室

主 催：神奈川大学21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

趣 旨：(1) COEの研究課題である図像、身体技法、環境・景観の体系化という成果を展示という形で社会に還元し、非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を、研究者だけでなく広く市民に向けても発信する。

(2) 発信にあたっては展示制作途中の市民による評価の導入など、市民が参加して展示を作り上げる展示手法や、展示が持つ視覚、聴覚、あるいは言語といった様々なバリアを超える展示手法など、展示に「実験」を試みる。

